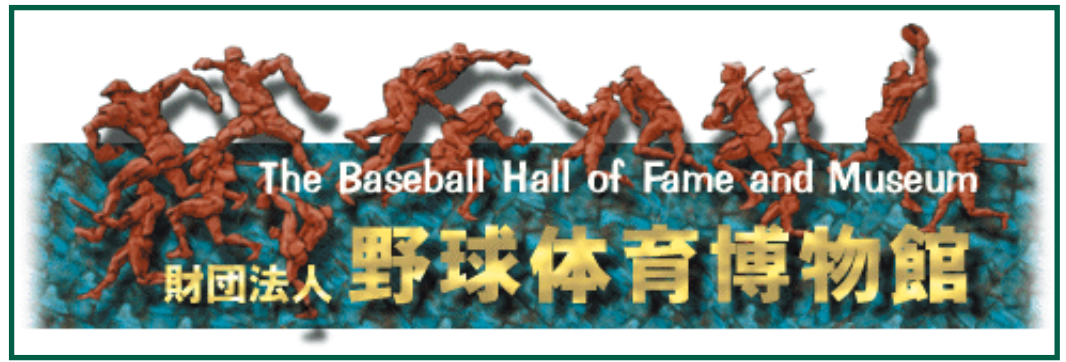




Vol.21 / No.2



平成23年 野球殿堂入り表彰式

事務局長 廣瀬 信一

平成23年野球殿堂入り表彰式は7月22日(金)、ナゴヤドームで行われたオールスター第1戦の試合開始前に、多くの観客や出場選手全員が見守るなかで行われました。

今回野球殿堂入りされた現・中日監督(2004年～)の落合 博満さんは、秋田工高から東芝府中を経て1978年のドラフト3位でロッテに入団されました。81年に打率.326で首位打者を獲得、翌82年には史上最年少の28歳で三冠王を獲得し、その後85年、86年と連続で三冠王となり、日本プロ野球史上未だ誰も達成していない三度の三冠王に輝きました。87年に中日に移籍後も打点王、本塁打王のタイトルを獲得し、また巨人、日本ハムでも活躍されました。

皆川 睦雄さんは米沢西高(現・米沢興譲館)から54年に南海に入団。南海の黄金時代を支えたスマートなサイドスローで、入団3年目から引退までに二桁勝利を12回達成するなど、安定したピッチングが光りました。中でも、68年には31勝を挙げ最多勝、最優秀防御率(1.61)の二冠を獲得し、ベストナインにも選出されました。引退後は、阪神、巨人、近鉄でコーチを務め、後進の指導に当たられました。

両軍の選手・監督・コーチが各々ベンチ前で整列し、場内アナウンスで落合 博満さん、故・皆川 睦雄さんの奥様、真智子さんがスクリーン映像の紹介とともに登場されました。はじめに、(財)野球体育博物館・加藤 良三理事長よりお二方に記念のレプリカが贈られました。次に、花束贈呈が行われ、かつてのチームメイトであった千葉ロッテマリーンズ・西村 徳文監督から落合 博満さんへ、同期入団でバッテリーを組んでいた野村 克也さんから皆川 真智子さんへそれぞれ贈呈されました。記念撮影に続き、前年リーグ優勝され、今回偶然にもこのオールスター戦でセ・リーグの監督を務める落合さんが、ユニフォーム姿で万感の思いを込めご挨拶をされました。奥様とのエピソードを交えながら殿堂入りの難しさを、最後は東日本大震災にもふれ、ご自身が秋田、皆川さんが山形出身であり東北人として復興に向けての励ましのメッセージでしめくり、地元名古屋のファンの喝采を浴びました。



左から 西村 徳文氏、落合 博満氏、加藤 良三理事長、皆川 真智子氏、野村 克也氏



《2011年夏休み情報！》

1 ⇒ 「野球で自由研究！」

～イベント編～

会 期 ▶ ～9月4日(日)
会 場 ▶ 館内 図書室ほか

野球には、歴史や用具、野球場など小・中学生の自由研究のテーマになるものがたくさんあります。館内の展示や図書室の本などを使って、楽しく自由研究ができるようスタッフがお手伝いします。また、今年の特設サイト「野球で自由研究！」をオープンしましたので、当館ホームページよりアクセスして下さい。



2 ⇒ 「バット製作実演」

日 時 ▶ 8月19日(金)、20日(土)
時 間 ▶ 11:00～12:00、13:30～14:30、
15:00～16:00 予定
会 場 ▶ 館内 野球殿堂ホール
協 力 ▶ ミズノ株式会社

バット削りの実演を今年も開催します！ミズノ株式会社のご協力により、クラフトマンによるバット製作の実演に加え、バットにまつわるいろいろな質問にもお答えします。自由研究にも活用できるイベントです。



1 ⇒ 企画展「プロ野球ヒーロー展」

～展示編～

会 期 ▶ ～9月4日(日)
会 場 ▶ 館内 企画展示室

日本プロ野球70年あまりの歴史の中で、たくさんのヒーローが誕生し人々を魅了してきました。今回の企画展では、草創期の伝説のヒーローから現代のヒーローまで、時代背景とともにご紹介します。



2 ⇒ 平成23年 野球殿堂入り特別展

会 期 ▶ ～10月16日(日)
会 場 ▶ 館内 野球殿堂ホール

落合 博満氏、皆川 睦雄氏の野球殿堂入りを記念して、「平成23年 野球殿堂入り特別展」を開催します。ゆかりの資料や写真を展示し、経歴や記録などをご紹介します。





殿堂入りの人々を語る (32)



1981年野球殿堂入り
岩本 義行氏レリーフ

父の思い出

岩本 一彦 (岩本 義行氏 長男)

父 (岩本 義行) は1912 (大正元) 年の生まれで、1934 (昭和9) 年明治大学を卒業しました。1936 (昭和11) 年プロ野球が誕生した際、全球団から勧誘があったそうですが、野球を職業とすることを良しとせず入団しませんでした。

1940 (昭和15) 年に南海 (現在のソフトバンクの前身) に入団して3年間お世話になり、それから6年間プロ野球を離れたのち大陽・松竹ロビンス (現在の横浜の前身) に入団しました。

私の思い出はこの頃からですが、当時は今のようなフランチャイズ制ではなかったので、一月に一週間程度しか家に居ず、休みはその内1日程度なのでどこかに遊びに行った記憶は全くありません。

選手時代に印象に残っていることが二つありますが、一つは試合で安打が出なかった日は帰宅して非常に機嫌が悪く寝るまで一言も喋りませんでした。

もう一つは阪神戦で18塁打 (プロ野球記録) を記録した時ですが長野県の上田からの帰りを大宮駅で迎え、上野駅まで一緒に帰ったのですが、その時は機嫌が良くにこにこしていたのを覚えています。

ちなみにプロ生活全期間を通じて記念品・副賞を家まで持ってきたことがありません。試合が終わってお世話になっている人・ファンに差し上げてしまうのです。この18塁打の記念品は純金製のバックルだったそうですが当然これも家がありません。あるのは副賞の置時計が一つ、これが選手時代10年間の唯一の記念品です。

その後、東映 (現在の日本ハムの前身) に選手兼監督、監督としてお世話になりました。

東映は当時万年Bクラスの球団で負ける試合が圧倒的に多い球団で、選手層が薄いので選手兼監督を務めました。

ちなみに45歳で捕手として出場したこともありました。

この時期の思い出は試合に負けると22時頃オーナー社長から電話があり30分以上に亘り何故投手を代えなかったとか何故代えたのかとか、何故スクイズをしなかったのか等々結果論を追及されて、家族一同不愉快な思いをしたことが印象に残っています。

監督を辞める際には家族全員賛成しました。

此の時期は試合に負けると一切新聞を読みませんでした。数少ない勝利の翌日は駅まで朝一番で自ら定期購入以外の新聞を買いに行き、嬉々として読んでいたのが強く印象に残っています。

プロ野球最後の近鉄時代は父・母が大阪に転居して私とは別居していたこともあり印象に残る事は在りませんでした。

晩年は少年野球に傾注していました。指導方法は余り技術的なことは言わず、野球に興味を持たせて自己啓発を促す指導をしておりました。

また、バットの原料であるタモの払底を心配して植林を考えて計画しておりましたが道半ばで2008 (平成20) 年9月96歳で永眠しました。



もの 知ってほしいこんな資料(75)

ブロンズ像『捕球の刹那』^{せつな}



『捕球の刹那』

『捕球の刹那』という題名が付いているブロンズ像をご紹介します。中松 潤之助氏(1968~71年プロ野球コミッショナー委員)のご家族から、1973年に当館に寄託されました。日本美術院の同人だった藤井 浩祐氏の作品で、高さは約23cmと小さなものですが、若々しさや清々しさといったものが感じられる像です。『運動年鑑』(1919年)には、1918(大正7)年の第1回全関東全関西対抗野球戦に際して、日本野球審判協会委員諸氏へ送られた記念品だと、大きな写真付きで紹介されています。

1918年11月23日、大阪、神戸在住の一流選手で組織した全関西野球団と東京、横浜在住の一流選手で組織した全関東野球団との間で、第1回全関東全関西対抗野球戦が鳴尾グラウンドで開催されました。早稲田、慶應、第一高等学校など当時の最高レベルのチームで活躍した名選手たちが出場する試合のため人気を呼び、当日は朝早くから多くの野球ファンが詰めかけたそうです。午後1時すぎ、大日本体育協会副会長

武田 千代三郎氏の始球式が行われ、全関西軍の先攻で試合が始まりました。試合は全関西軍が2、6、7回にそれぞれ1点を入れたのに対し、全関東軍は無得点に終わり、3対0で全関西軍が勝利しました。この日の球審は腰本 寿氏(慶應OB 1967年殿堂入り)、中松氏は市岡 忠男氏(早稲田OB 1962年殿堂入り)、折田氏と共に塁審を務めています。

翌24日の第2戦も、全関西が6対3で勝利。その後、両チームと審判員混合の紅白戦が行われ、紅軍は石川一、中松、白軍は折田、芦田一高浜のバッテリーで7回を戦い、紅軍が3対2で勝利しました。

1918(大正7)年は、一高野球部主将で捕手だった中松氏にとって、内村 祐之氏(1962~65年プロ野球コミッショナー、1983年殿堂入り)とのバッテリーで、早稲田、慶應、学習院、第三高等学校を連破して一高の黄金時代を再来させた記念すべき年です。その秋に、オールスター戦ともいえる試合の審判を務めた記念のブロンズ像です。大切されていたのだと思われます。

全関東全関西対抗野球戦は、翌年4月に第2回が早稲田大学戸塚球場で、11月に第3回が再び鳴尾グラウンドで開催されています。

大正7年11月23日

第一回全関東全関西対抗野球戦出場メンバー

全関東

中 八幡 恭助 (早稲田OB)
 二 泉谷 祐勝 (早稲田OB)
 遊 岡崎 孝平 (一高OB)
 捕 島田 善介 (慶應OB 1969年殿堂入り)
 一 菅瀬 一馬 (慶應OB)
 右 小山 万吾 (慶應OB)
 投 芦田 公平 (一高OB)
 三 桜井 弥一郎 (慶應OB 1960年殿堂入り)
 左 浅沼 誉夫 (早稲田OB)

全関西

遊 加藤 吉兵衛 (早稲田OB)
 二 佐伯 達夫 (早稲田OB 1981年殿堂入り)
 捕 三宅 大輔 (慶應OB 1969年殿堂入り)
 中 高浜 茂 (慶應OB)
 一 富樫 興一 (慶應OB)
 右 増田 稲三郎 (早稲田OB)
 三 日下 輝 (慶應OB)
 左 西尾 守一 (早稲田OB)
 投 石川 真良 (慶應OB)

学芸員 新 美和子



コラム／博覧・博楽 (39)



戦火に消えた名捕手 — 巨人軍最強の捕手・吉原正喜 —

澤宮 優 (ノンフィクション作家)

吉原 正喜よしはら まさきという戦前の巨人軍の名捕手を知ったのは、私が小学4年生のときだった。少年向けの野球本に、吉原が熊本工業で川上 哲治とバッテリーを組み、甲子園で準優勝したこと、昭和13 (1938) 年巨人に入団しファウルボールを追ってベンチの屋根に激突、頭が血だらけになってもボールを離さなかったことが書かれていた。しかも捕手にして俊足で、近代野球の捕手の祖型とも言える選手だった。熊本県出身の私にとって、英雄と言え「打撃の神様」と呼ばれた川上 哲治だったが、巨人は川上よりも吉原を欲しがったという話を聞いたとき、そんな凄い選手が熊本にいたのかと驚いた。

吉原は昭和17 (1942) 年に兵隊に取られ、その後ビルマで戦死したから、実働は4年に過ぎない。彼を知る人に追憶として残るだけである。死して六十年近くたち、吉原は忘れ去られようとしていた。私は吉原の伝記を書くことで、今、悩める若い人たちに一生懸命生きることの美しさを伝えたいと願った。平成11 (1999) 年の冬であった。

この日から野球体育博物館に通う日々が始まった。図書室では、当時の雑誌『野球界』や戦前の「読売新聞」のスクラップを一枚一枚捲るたびに、伝説としてしか知らなかった吉原の実像が浮かび上がった。

昭和13 (1938) 年7月23日の「読売新聞」には、捕手吉原が走者をタッチし、審判にボールを突き上げ、鋭い眼で睨みつけている写真がある。見出しには「吉原の頑守・江口憤死」とある。金鯱戦で、吉原は三塁走者と激突し、吹っ飛ばされ、唇を切らしたがボールは離さなかった。アウトの判定がなされたとき、観客席からは一斉に歓声が上がったという。

また昭和14 (1939) 年4月3日の「読売新聞」には、左足を負傷し復帰したとき「吉原の登場は巨人軍ファンを頗る喜ばせて彼の名が打撃順中に読みあげられると時ならぬ拍手歓声が湧き起った」と書かれてある。吉原の人気者ぶりを改めて実感できた。

吉原は昭和19 (1944) 年ビルマのインパール作戦で戦死したが、戦病死とも言われ、遺骨は見つかっていない。手榴弾で自決したとも言われている。

雑誌を紐解くうちに、突然吉原の遺稿に出会った。『野球界』昭和17 (1942) 年5月1日号である。吉原の筆で「球生活五年の回顧——矜持も高き新目標に進むにあたりて」と書かれた記事を目にした。副題にある「新目標」とは戦地で戦うという意味である。

<あしかけ五年というふものをこの世界で送り、若い生命を燃え上がらせたにも拘らず、私の胸の底には何の感慨も湧きあがって来ずして、たゞ「夢のやうな」といふ掴みどころのない言葉が、まるで霧のやうにひろがつてゆくのである>

そして最後にこう締めくくっている。

<私は今こそ、数々の思ひ出とともに、若い生命を激しく灌ぎ込んだ懐かしの球界を去る>

初めて触れた吉原の声だった。館内では巨人の名二塁手の千葉 茂氏ともお会いした。氏は同期の吉原を、いつも元気流刺で胴間声を出してチームを引っ張り「きびきびしてヤクルトの古田 敦也のようだった」「後にも先にも吉原以上の捕手は巨人にはいない」とも語られた。女優 高峰 三枝子とのロマンスなど男性としても大変魅力に富んだ人物だったと話された。多くの人、資料に支えられて吉原の伝記は『巨人軍最強の捕手』(晶文社) という題で平成15 (2003) 年に刊行された。(編集部注・この本は当館図書室で閲覧できます)

吉原は昭和53 (1978) 年特別表彰で野球殿堂入りを果たした。今、館内の殿堂ホールには彼のレリーフがある。帽子を後ろ向きに被り、引き締まった精悍な顔は伝説のファイターそのものである。

私は今もときおり館内の殿堂ホールを歩く。沢村 栄治(巨人)、景浦 将(阪神)、中河 美芳(黒鷲) など戦死した選手の像を見るたびに、才能ある若い命を奪った戦争の惨さを思う。そのとき川上 哲治氏が取材で話された言葉が必ず甦る。

「吉原も戦争から元気で帰って、自分たちが戦前やった野球が今こんなに盛んになっていることを見せて死なせてあげたかった。沢村さんも、景浦さんも、吉原もプロ野球の先覚者たちですよ。そういう人たちがあって、現在があることを忘れてはいけない」

8月15日は終戦記念日、館内の様々な展示物や資料から、野球を通して改めて戦争の悲しさと平和の尊さについて考えてみたい。



こんにちは図書室です



今回は朝日新聞社が1923（大正12）年に創刊した「アサヒスポーツ」をご紹介します。



アサヒスポーツ創刊号の表紙（1923年）

アサヒスポーツ創刊号はタテ37センチ×ヨコ26センチ、32ページで、きれいなグラビア写真が多く使われているスポーツ総合雑誌です。戦前は1923（大正12）年3月～1943（昭和18）年6月まで、月に2回発行されました。戦後は1948（昭和23）年1月から週刊で発行され、その後、1954（昭和29）年10月から月2回発行に戻り、1956（昭和31）年1月まで続きました。

創刊当時の朝日新聞社社長である村山 龍平の伝記「村山龍平傳」（朝日新聞大阪本社社史編修室編 朝日新聞社 1953年）によると、「社会の要望を充すため運動雑誌の創刊が企てられた。…国民全般の体育に関する認識の程度も不足していた。朝日新聞は夙くより紙面の一部を割いて運動競技は勿論、武術、相撲、その他各種体育関係の記事を掲載したのであるが、なお一層この方面に関する一般の趣味と教養を高めるため運動競技専門の雑誌「アサヒスポーツ」を刊行することとなった」とあります。

そのため、朝日新聞はそれまで社会部に付属していた運動係をなくし、大阪朝日では運動部を、東京朝日では運動課を設置し、日々の新聞に掲載する運動競技に関する記事とアサヒスポーツの編集を行っていたようです。

また、創刊と同時に運動競技の試合結果を付録として出していました。創刊号の付録はB5サイズの活版印刷で9ページ。野球・庭球・陸上競技・蹴球・端艇・籠球・スキー・ホッケー・武術・卓球の10種目の試合結果が掲載されています。当館では1940（昭和15）年まで所蔵しています。

野球に関して、貴重な資料になっているのは、全国中等学校優勝野球大会や、春・秋の東京六大学リーグ戦のときなどに出ていた特集号です。当館で所蔵する野球の特集号で一番古いものは1923（大正12）年9月1日に発行された「第九回全国中等学校野球大会号」です。大会前日に行われた選手歓迎茶話会の様子や、空撮された鳴尾球場、プレー中の選手や応援席の写真など大会の様子がよくわかります。



第九回全国中等学校野球大会号（1923年）

野球に限らず、戦前のスポーツの記事や写真、試合記録をご覧になりたい方はアサヒスポーツと付録を是非、ご利用ください。

※図書室にあるアサヒスポーツは1923（大正12）年の創刊号から1956（昭和31）年まで所蔵しておりますが、欠号がありますので、お問い合わせください。

司書 茅根 拓



野球体育博物館 トピックス (2011年5～7月編)

【5月20日】村田氏が来館！

村田 兆治氏 (2005年殿堂入り) が、BS ジャパン「小林 麻耶の本に会いたい」の撮影で来館しました。館内の応接室や野球殿堂で撮影が行われ、この模様は6月17、24日に放送されました。



【5月20日】野球殿堂入りの人々 写真表示システム導入

昨年10月にイベントホールに設置した「野球殿堂入りの人々 写真表示システム」を、殿堂ホールにて46インチ大画面タッチパネルで公開しました。7月23日からは、よりたくさんの写真を紹介できるようバージョンアップを行いました。沢村投手の写真も大画面でご覧いただけます。ぜひご利用下さい！

【7月3日】松永氏が来館！

松永 怜一氏 (2007年殿堂入り) が来館され、企画展「全日本大学野球選手権大会60回記念展」をご覧になりました。

松永氏は法政大学監督として第17回全日本大学野球選手権大会で優勝しています。



女子野球コーナー

当館では、昨年10月から女子野球の展示コーナーを設置し、女子野球日本代表をはじめ、1950年ごろの女子プロ野球、2010年に始まった現在の女子プロ野球などの展示をしています。

女子サッカー日本代表のワールドカップ優勝が大きな話題になっていますが、女子野球日本代表は2008年、2010年とIBAF(国際野球連盟)のワールドカップで優勝し、二連覇を達成しています！ 本年6月20日には、2012年にカナダで開催される第5回IBAF女子野球ワールドカップでの三連覇を目指して、第一次代表メンバーが発表されました。

博物館からのお知らせ

▶理事・評議員会

平成23年度の理事会・評議員会を6月13日(月)午前11時より、東京ドームホテルにて開催しました。

理事および監事、評議員の計36名(意見書出席を含む)の出席があり、次の議題について、承認されました。



議題1. 平成22年度の事業報告・決算報告・監査報告承認の件

議題2. 評議員選定委員会設置の件

議題3. その他 財団法人野球体育博物館維持会員規則一部改定の件

なお、平成22年度事業報告・決算報告および平成23年度事業計画・予算は、当館ホームページでご覧いただけます。

▶評議員の交代

4月12日付で、前評議員・西脇 紀人氏の後任として、佐藤良平氏(中日ドラゴンズ取締役球団代表)にご就任いただきました。

今後とも、よろしくお願い致します。

●編集後記 3月におこった東日本大震災の影響で、野球競技も日程を変更している大会があります。その1つが都市対抗野球で、今年は10月22日から京セラドーム大阪で行われることになりました。

▶人事

当館の管理部長・海北 光正氏が出向解除となり(株)東京ドームへ帰任し、後任に(株)東京ドームから中本 夏樹が出向し就任いたしました。



中本 夏樹 (1959年7月14日生)

日本大学文理学部卒業後、1984年(株)後楽園スタジアム(現・(株)東京ドーム)に入社。球場売店、物販事業、総務部、人事部等を経て7月1日付けで博物館へ出向。

「3年前からまた、時々硬球で、汗をながしています。今後ともどうぞよろしく願いいたします。」

●博物館のご案内

場 所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日～9月30日 AM10時～PM6時

10月1日～2月末日 AM10時～PM5時

(入館は閉館の30分前まで)

*閉館時間が変更になる場合もありますので、ホームページなどでご確認ください。

入館料 大 人 500円(300円) } ()は
小・中学生 200円(150円) } 20名以上の団体
65歳以上 300円

休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)
年末年始(12月29日～1月1日)

《8月・9月・10月の休館日》

8月 休館日はありません。

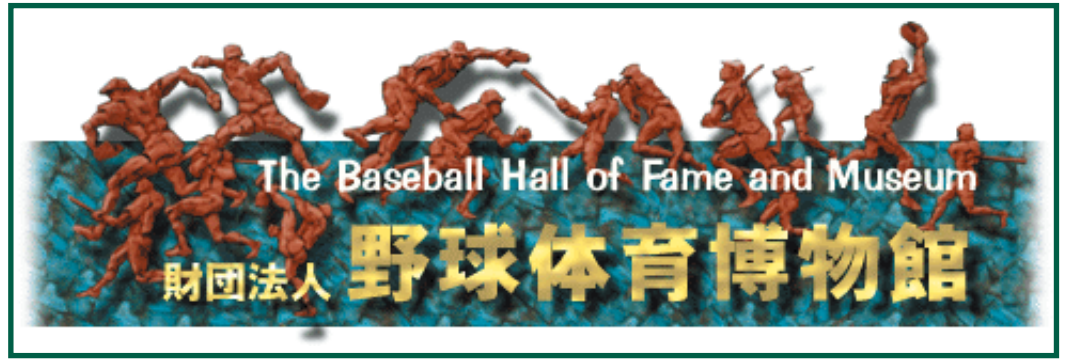
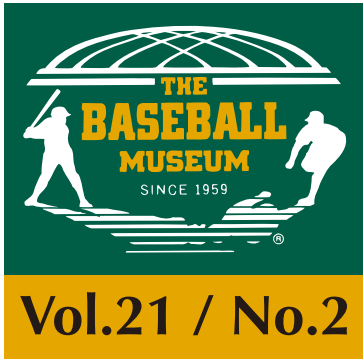
9月 5日・12日・26日

10月 3日・17日・24日・31日

Newsletter Vol.21 / No.2

2011年7月25日発行

編集・発行 財団法人 野球体育博物館
〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61
Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369
<http://www.baseball-museum.or.jp/>
定 価 100円



リレー随筆(45)

野球の底力

競技者表彰委員会幹事 安藤 嘉浩(朝日新聞社)

東日本大震災の発生から約2カ月が過ぎた5月21日、被災地の宮城県に、往年の名選手たちの姿があった。日本プロ野球名球会による少年野球教室。沿岸部の被災地から参加した小中学生約350人の真剣な表情と笑顔が、五月晴れの空の下に広がった。

イベントは名球会の王 貞治理事長(71)の「大変困難な状況が続いていることと思いますが、みんなで力を合わせ、一步一步踏みしめて歩いて下さい」という激励あいさつでスタートした。

張本 勲さん(70)、柴田 勲さん(67)、山本 浩二さん(64)、鈴木 啓示さん(63)、山崎 裕之さん(64)、藤田 平さん(63)、若松 勉さん(64)、北別府 学さん(53)、立浪 和義さん(41) = 年齢はすべてイベント当日 =。テレビで知る名選手のユニホーム姿に、子どもたち以上に、付き添いの大人たちがはしゃいでいるようにも見えた。

仙台市を本拠にする楽天の嶋 基宏選手会長が「見せましょう、野球の底力を」と宣言したのはプロ野球の開幕前、4月2日のチャリティーマッチだった。

つらい経験、つらい毎日を一時だけでも忘れさせる力が、確かに野球には宿っている。

阪神大震災が発生した1995(平成7)年、地元のオリックス・ブルーウェーブが「がんばろう神戸」を合言葉にリーグ優勝を果たした。

「選手個人の方で見れば、優勝なんてとても無理だった。震災で水の出ない自宅に家族を置いたままキャンプに来た選手もいた。チーム全体が集中力を欠き、仕上がりは遅れた」。チームを率いた故 仰木 彬監督が後に語っている。

「シーズンが開幕し、予想を超えた快進撃を生んだのは、合言葉のもとで生まれた一体感だった。選手のプレーから『神戸でがんばるんだ。復興に向かうんだ』という気持ちが伝わってきた。あの時のチームは、プロ野球団というより、神戸そのものだった」

さらに半世紀さかのぼる1945(昭和20)年の11月18日。終戦直後の荒廃した日本に、希望の灯りをともしたのも野球だった。

東京六大学野球のオール早慶戦が開催されたのだ。終戦を告げる昭和天皇の玉音放送から、わずか3カ月ほど。進駐軍に接収され、「ステート・サイド・パーク」と呼ばれた神宮球場で行われた試合は、練習不足もあって両チームともミスが目立った。それでも観衆は大喜びで、また野球ができる平和をかみしめたという。「試合が終わって、夕暮れが迫っても、4万5千人の観客がなかなか帰ろうとしない。薄暗くなった球場に、たばこの火が、まるでホテルのようにともっていたのがとても印象的でした」。早稲田大学のマネージャーとして開催に奔走した相田 暢一さんが、しみじみと話してくれたことがある。

東日本大震災では、東北地方の太平洋沿岸部が壊滅的な被害を受け、福島第一原発の事故が復興への動きに暗い影を落としている。

だからこそ、時間をかけて、被災地に寄り添い、勇気づけ、支援していかなければならない。

大がかりなイベントじゃなくてもいい。例えば現役選手がオフを利用して被災地に足を運び、地元の少年野球チームを激励することだってできるだろう。できるだけ長い期間にわたって、そういう機会をつくってあげたい。

名球会の野球教室で指導を受けた子どもたちの「はいっ」という元気な返事が、いまでも耳に残っている。緊張しながらも、どこか晴れやかな表情、それを見守る大人たちの笑顔もすてきだった。

10年先、20年先に、「野球のおかげでがんばれた」と振り返る被災者が1人でも増えたら、どんなに素晴らしいだろう。「野球の底力」が試されるのは、まだまだこれからだ。